

とびラジオ～とびラーが語るイサム・ノグチ

(曲入る)

【OP】

みなさん、こんにちは。「とびラジオ」パーソナリティーの、とびラー 長尾（ナガオ）です。現在、東京都美術館では、特別展「イサム・ノグチ 発見の道」を開催しております。「イサム・ノグチの彫刻を配置した空間」そのものが作品のような展示室の中で、芸術家イサム・ノグチの魅力を存分に感じていただけたと思います。

そんなイサム・ノグチの世界を、今日はこのラジオで、私達 とびラーと一緒に味わってみませんか？

題して「とびラーが語るイサム・ノグチ」

「イサム・ノグチ 発見の道」展から、3つの作品をじっくりと鑑賞し、お互いの気付きや想いを言葉にしました。架空のアート番組や、ポエム、展示室での会話など、さまざまなスタイルがあります。

お手元に、チラシをご用意して聞いてください。みなさんが自由に作品を楽しんでいただく、きっかけになれば嬉しいです。

(曲入る)

【MC①】

最初は、お手元のチラシの作品番号12番 《無題》 表紙にもなっている作品です。架空のアート番組の中で「イサム・ノグチ発見の道」展を鑑賞したレポーターが、気になった作品を紹介しているようですよ。みなさんも、チラシの写真を見ながら、一緒に聞いてみましょう。どうぞ。

【《無題》】

司会 「それでは《今週のオススメ彫刻》の時間です。今日は《イサム・ノグチ発見の道》を見てきたトビヤマさんにお話しを伺います。

トビヤマさん、今日紹介してくださるのは、どんな彫刻ですか？」

レポーター 「はい、今日はこのチラシの表紙にある《無題》という作品です。」

司会 「実際に見てきてどうでしたか？」

レポーター 「この石、写真と色が全然違うんですよ。」

司会 「え？どうちがうんですか？」

レポーター 「まず、写真では、屋外で濡れてるらしく、黒く見えますが、展示室では白っぽく、ちょっとピンクにも見えるんです。光や濡れ方で全然違って見えます。で！色もおもしろいんですけど、なにより形が面白いんです。この石いくつあるように見えます？」

司会 「え？前と後ろに2つの石があるんじゃないですか...？」

レポーター 「そう見えますよね。実は、これ、1つの石なんですよ。」

司会 「そうなんですか？（驚いて）」

レポーター 「見えないですよ？（面白そうに）
これ右側に立つと下が繋がっているのがわかるんです。
で、左側から見ると、今度は2つの石が上下に重なっておんぶしているように見えるんです。しかも真後ろに立つと、石が自分の方に迫ってくるんですよ。まるでサーフィンの波みたいに覆いかぶさってくるんです。」

司会 「えー！いったいどうなってるんですか？（混乱して）1つの石なんですよね？」

レポーター 「はい。でも、見る位置によって変わるんです。
2つの石が前後に並んでるようだったり、上下に重なっているように見えるんです。不思議なんです。
何を考えてこの形を作ったのだろう？って思いました。」

司会 「それはチラシじゃわかりませんね。ほかにも面白かったことはありますか？」

レポーター 「そうですね...この作品、面によって様々な表情があるんですよ。丸くて柔らかそうな面とか、ぼこぼこした面、ツルツルやざらざらな面もあるんです。そこから、私はこの作品に人の多面性みたいなものを感じたんですよ。
ツルツルに磨かれた面では、すました表情を見せてますが...裏側のただ石を割っただけのざらざらな面ではたくましさを感じたり...
そして2つの石が寄り添ったような形から、優しさや温もりも感じました。」

司会 「そうなんですか。これはイサムノグチ、最晩年の作品だそうですね。彼自身、たくさんの人と出会って、いろんなことを感じてきたからこそ、表現できた作品かもしれませんね。」

レポーター 「確かに...イサムノグチの包容力を感じた気がしました。」

司会 「皆さんはどう感じるでしょうか。ぜひご自分の目で確かめてみてください。
以上、『今週のオススメ彫刻』でした。トビヤマさん、ありがとうございました。」

レポーター 「ありがとうございました。」

【ジングル】

(曲入る)

【MC②】

次は、お手元のチラシの作品番号2番 《黒い太陽》です。さまざまな表情を持つこの作品から、イメージを拡げた女性が、詩を作り朗読しています。聞いてみましょう。

【《黒い太陽》】

女性語り手 「引き寄せられる 展示室入り口の、黒いタイヤのようなあの石に」
「置かれる 灰色の四角い台座に、どっしりと立っているかのよう」
「光る 長い時間をかけて丁寧に磨かれた黒い体がつやつやと」
「凹凸（デコボコ） クレーターのように出っ張ったり、引っ込んだり」
「違う 前と後、微妙に異なるおうとつ 丸みを帯びていたり、台形のようなだったり」
「ずれている 中心より少し外れた場所に穴がある」
「吸い込まれる すべてを飲み込むブラックホールのような空洞の目に」
「放たれる 太陽のような強烈なエネルギー 色・艶・形」

「だからだろうか？ 作品が活着しているかのように感じられるのは...（間）」
「なぞらえる タイヤのように大きな彫刻を 親しみを込め“黒”と名付けて」

「うぬぼれる黒 漆のようにつやびかりした自身の姿を かつこいいなど」
「人懐っこい黒 後ろに吊るされた、たくさんのあかりとおしゃべりをしたいみたい」
「励ます黒 そういう時もあるさ！ 元気がなさそうなあいつを見かけて」
「転がる黒 うずうず、わくわく、ごろり、ごろごろ」
「飛び出す黒 展示室から動物園まで 双子のパンダに会いたくて」

「立ち戻る 2021年、東京、マスクをして作品と向き合うこの時に」
「問いかけられる どこから来てどこに行くのと」
「生きる 静と動を内に秘めて...」

(曲入る)

【MC③】

では、最後の作品です。お手元のチラシの作品番号8番。タイトルは《プレイスカulpture》です。二人の男女が目の前の作品を語る会話劇です。どんなことを話しているんでしょうね？

【《プレイスカulpture》】

女性 「わあ、真っ赤だなあ。よく見るとオレンジ色が混ざっていてすごく鮮やかな赤！
周りの壁の色が暗い紺色だから部屋に入った途端、一番最初に目に飛び込んでくる。
存在感があって展示室の王様って感じがする」

男性 「大きさはどうだろう？太さは電信柱くらいで小型の自動車くらいのサイズかな？」

女性 「上下に大きく波打ってるね！嵐の日の波みたい」

男性 「そうかなあ…スムーズに上から下へ、下から上へ波打ってる。荒々しいというより滑らかさを感じるな。この波に乗ってみたいなあ。一緒に揺られたら気持ち良さそう！（楽しそうに）」

女性 「なるほど…輪っかの様に繋がってるから、いつまでもユラユラ乗ってられるね」

男性 「あっ！これは遊具なんだね！（驚いて）世界中の公園に置いてあるみたいだぞ。
でも美術館にあるって事は芸術作品だよな…一体どっちなんだろう。
こうやって考えさせるあたり、なんだか手ごわさを感じるなあ…どんどん興味が湧いてきたぞ！（ワクワクしながら）」

女性 「よく見ると他の彫刻は台座にしっかり付いているけど、この作品は細い支柱3本だけで支えているね。足元に軽さを感じて宙に浮いているように見えるね」

男性 「僕はそこにユーモラスさも感じるな。だってこの大きな体を3本の短い足で支えているんだよ！」

女性 「さっき遊具だって教えてくれたけど、こうしてじっくり見ると、難しい芸術作品というより、もっと私達に身近な作品なんじゃないかなって思えてきた。」

男性 「どうして？」

女性 「真っ赤な目立つ色が、一緒に遊ぼうよ！って誘っているよう。公園でウネウネしたダイナミックなこの作品を目にしたら、低いところからよじ登れそうじゃない？
そこでまたがってみたり、歩き始めてみたり…どうやって遊ぼうかな？ってワクワク感が募るんじゃないかなあ」

男性 「大きなカーブに乗かって1人でのんびり寛ぐのもいいけど、家族や友達、身近な人と一緒にこの作品を囲んだらもっと楽しそうだなあ。

アートでありながら、鑑賞するだけじゃない。触れて遊んで楽しさを共有できる『人と人を繋ぐ』作品なんだよね～（感心するように）」

(曲入る)

【ED】

3つのストーリーは、いかがでしたか？

この「とびラジオ」を聞いてくださった感想や、実際、美術館で作品を前に、みなさんが感じたことや気づいたことなど、ぜひご家族やお友達同士で、話してみてください。さらに新しい発見があるかもしれませんね。

「とびラジオ～とびラーが語るイサム・ノグチ」は、この他に、あと2つの番組をご用意しています。そちらもぜひお楽しみください。

本日は、最後までお付き合いいただき、ありがとうございました。

「イサム・ノグチ発見の道」展は、東京都美術館で8月29日 日曜日まで開催しております。いつの日か、東京都美術館でお会いできますことを、とびラー一同、心から楽しみにしております。

(了)